

アフリカのキリン

保全活動ガイド

画像と地図を提供していただいた Cindy Armstrong さん、Billy Dodson さん、Simon Naylor さん、William Walden さん、ありがとうございました。

保全状況

キリン保全財団 (GCF) とそのパートナーは、これまでキリンは 1 種と考えられていたものを、新たな科学的証拠に基づいて「マサイキリン (*Giraffa tippelskirchi*)、キタキリン (*G. camelopardalis*)、アミメキリン (*G. reticulata*)、ミナミキリン (*G. giraffa*)」の 4 種として認識しています。また、アミメキリンを除いたすべての種は 2 つまたは 3 つの亜種で構成されています。

しかし、国際自然保護連合 (IUCN) のレッドリストでは、現在もキリンは 1 種 9 亜種と認識しており、キリン (*Giraffa camelopardalis*) として VU (危急) に分類されています。IUCN が認識している 9 亜種のうち 8 亜種は、IUCN レッドリストで個別に評価されています。コルドファンキリンとヌビアキリンは CR (深刻な危機)、マサイキリンとアミメキリンは EN (危機)、ルアンダワ (旧ソーニクロフト) と西アフリカキリンは VU (危急)、ロスチャイルドキリンは NT (準絶滅危惧)、アンゴラキリンは LC (低懸念) としています。そして南アフリカキリンだけが NE (未評価) としてまだ個別に評価されていません。

1980 年代、アフリカに生息するキリンの数は 155,000 頭以上であると推定されていました。現在 GCF ではキリンの個体数はおよそ 117,000 頭であると推測しています。これは約 30% の減少であり、2016 年に IUCN は 100,000 頭を下回ると予想していましたが、やや明るい見通しとなりました。この最新の情報は、個体数の増加や改善を考慮したものです。しかし、残念なことに、主要な生息地の数は 95% 減少したと考えられています。

最新の個体数増加のニュースは前向きなものであり、一部の地域が安定または増加している事実もありますが、全体的な数はまだ比較的小さい状況です。今こそ行動を起こすべき時なのです！

保全の重要性

キリンは生息地とその景観を変化させます。ゾウやクロサイのような他の草食獣と一緒に植物が生長した地域を開いていき、それによって彼らや他の動物たちの新たな餌となる植物の生長を促しています。

もう少し具体的に言うと、キリンが植物を食べることで様々な植物の発芽を促し、さらには花粉の媒介も行います。キリンなどの大型草食動物から保護されている地域では、アカシア (セネガリアやバケリア) の減少がみられ、その結果、他の野生動物の食料源に影響を与えることになってしまいます。

また、キリンは植物の種子を食べ、糞を通して種子を新たな場所に分散させる役割も持っています。種子はキリンの消化管を通過することで強化され、さらに肥料にも包まれていることで発芽率が上がるのです。

キリンと相利共生の関係にあるのは植物だけではなく、ウツツキなどの動物も挙げられます。これらの鳥はキリンが届かない場所の毛づくろいをすることで、キリンに寄生するダニを取り除き、それを貴重な食料源としているのです。

経済的

キリンの重要性は、その独特な進化にあります。この間違えようのないシルエットは、製品の販売やイベントなどのシンボルとして世界中で利用されています。キリンがアフリカのシンボルであるのと同じくらい、その独特な姿と穏やかな性格は様々な目的で広く利用されています。キリンは多くの人に愛されているのです。

アフリカでは、観光業によって生み出される経済効果が、野生動物のいる地域で生活し働いている人たちのモチベーションとなっています。多くの旅行会社やサファリでは、アフリカがエキサイティングな旅行先であることを宣伝するためにパンフレットにキリンを掲載しています。そしてアフリカへ旅行に行く人にとってもキリンは必ず見たいもののなのです。

ビッグファイブ (= アフリカのサバンナゾウ、ライオン、ヒョウ、バフファロー、クロサイ) や数少ない有蹄類とはちがって、キリンは記念品としての需要がありません。そのため狩猟や身体の一部の取引はあまり行われず、それによる個体数の減少は起こりませんでした。

保全上の優先事項

- キリンの生息地を確保し、既存の生息地を保護する
- キリンの窮状に対する意識を高めることによって、アフリカおよび国際的なキリン保護の重要性を促進する
- キリンの生態学、生理学、分類学、保全および管理について理解を深めるため、対象を絞った革新的な保全科学を支援する
- キリン全種とその亜種の現状を把握し、保全と管理を支援する
- キリンに対する主な脅威とそれを軽減するための革新的な方法を特定する
- キリンの未来を守るため、特にキリン生息国において、個人および組織の能力とスキルを向上させる
- キリンに関する保全、科学、管理に関する議論の場とプラットフォームを提供し、支援する
- アフリカ政府、地域社会、NGO、利害関係者と協力し、人と野生動物双方の持続可能な未来のために、キリンの保護活動を推進・支援する

キリンを取り巻く脅威

生息地の消失、生息地の分断、生息地の衰退、人口増加、密猟、病気、戦争や社会不安といった影響によって、キリンとその生息地が脅かされています。脅威の多くは人間の資源をめぐる争いによって直接的、間接的に引き起こされています。生息地の減少は、農地や牧畜、木材の確保のために人間が土地を必要とすることが原因で起こっています。

人間とキリンとの衝突は一般的にはありませんが、農作物の被害や、家畜と生息地を共有することによる伝染病などによって衝突が起こる可能性があります。キリンの生息地の分断や消失は、人間の侵略や土地の開発によって引き起こされており、キリンの個体群が孤立することにより遺伝的多様性が失われています。

キリンの異種交配も問題であり、それぞれの種の遺伝的な特性が消失してしまう恐れがあります。野生下で異種交配が起こるという証拠はありませんが、すでにある種のキリンが生息している地域に他の種を導入することによって異種交配が起こる可能性はあります。そしてそれは南アフリカですでに起こっているのです。

分類と個体数

綱：哺乳綱

目：偶蹄目

科：キリン科

属・種・亜種

キタキリン

コルドファンキリン

ヌビアキリン

西アフリカキリン

ミナミキリン

アンゴラキリン

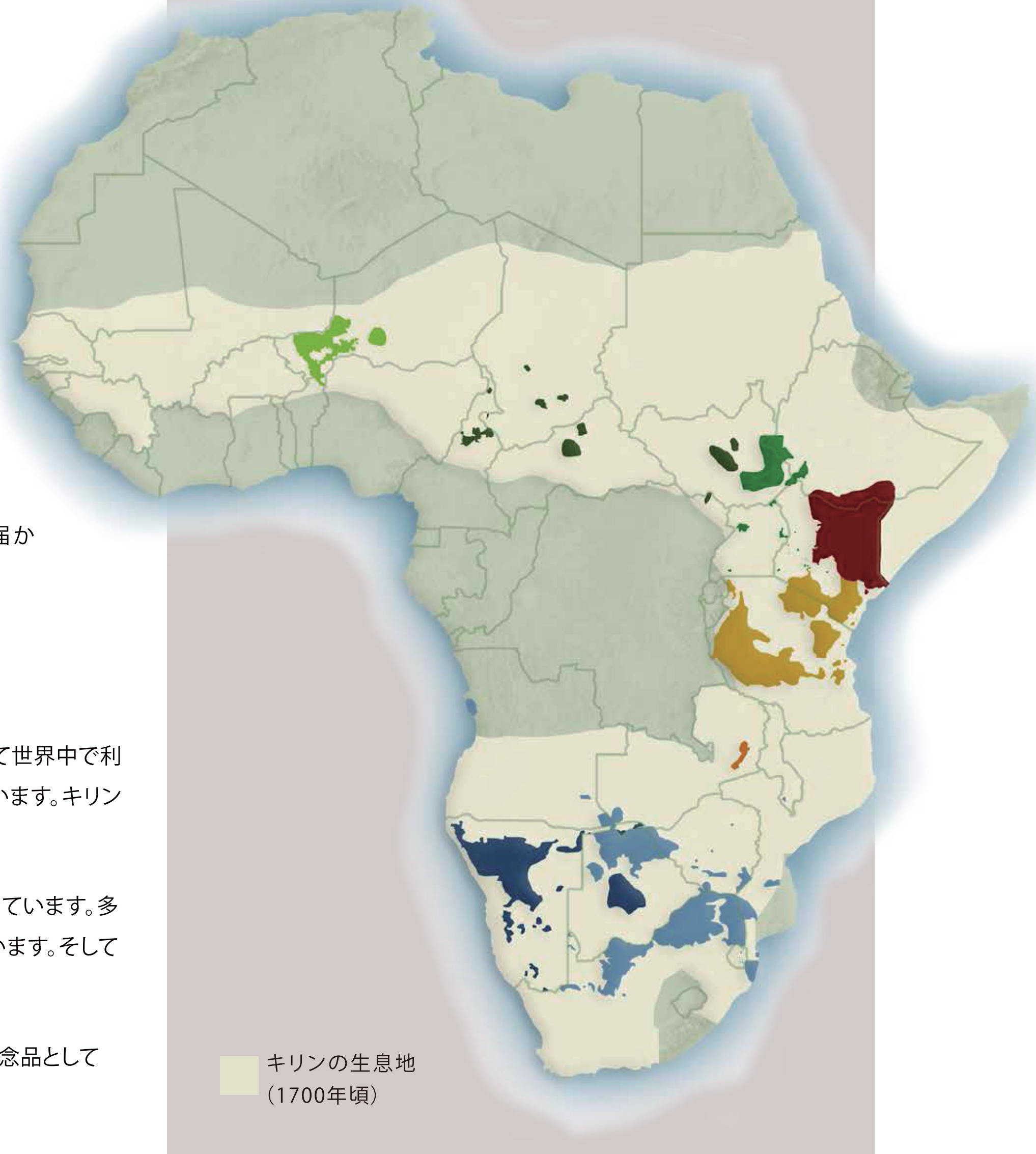
南アフリカキリン

アミメキリン

マサイキリン

ルアンダワキリン

マサイキリン



マサイキリン	<i>Giraffa tippelskirchi</i>	45, 400
ルアンダワキリン	<i>G. t.thomicrofti</i>	650
マサイキリン	<i>G. t. tippelskirchi</i>	44, 750
キタキリン	<i>Giraffa camelopardalis</i>	5, 900
コルドファンキリン	<i>G. c. antiquorum</i>	2, 300
ヌビアキリン	<i>G. c. camelopardalis</i>	3, 000
西アフリカキリン	<i>G. c. peralta</i>	600
アミメキリン	<i>Giraffa reticulata</i>	15, 950
ミナミキリン	<i>Giraffa giraffa</i>	49, 850
アンゴラキリン	<i>G. g. angolensis</i>	20, 200
南アフリカキリン	<i>G. g. giraffa</i>	29, 650



キリン保全財団 (GCF) は、野生のキリン個体群の持続可能な未来のために活動しています。GCF は、アフリカに生息するキリンの保全と管理に特化した世界で唯一の NGO です。

giraffeconservation.org

保全活動における制限要因

科学的

キリンに関する長期的な研究や昔から現在までの信頼できるデータ、そしてキリンを対象とした保全研究の存在は限られています。この情報の欠如が、保全と管理そして生態学と分類学の発展を制限してしまっているのです。しかし興味深い進歩も見られています。

GCF が実施した遺伝子の共同研究では、キリンの分類学を取り巻く謎を解明し、4 つの種の保全と管理についての情報を提供しました。現在アフリカで行っている研究のいくつかは、キリンの生息する自然環境で初めて実施されているものです。

生態学的

キリンの個体数は、捕食や病気による死亡によって変動しており、これは個体群によって異なります。ライオンはキリンの最も大きな捕食者です。一部の個体群では、1 歳未満のキリンの子ども死因のうち 50% 以上がライオンによるものです。キリンはヒョウやブチハイエナから攻撃されることは少なく、チーターやワニからの攻撃はさらに少ないです。また、キリンの個体数は水不足の影響も受けており、食物の質や量の不足による栄養失調や炭疽菌といった病気、牛疫 (= 偶蹄類の感染症) を引き起こします。それに加えて、特定のエリアでは人間による密猟も個体数の変動の要因となっています。

社会的

保全に関してキリンは、サバンナゾウやサイといった他の種の保全と主に資金の面で競い合っています。しかし現在のキリンの個体数はサバンナゾウの 3 分の 1 強に過ぎないことが分かっています。この矛盾と現状が世界の多くの人に知られていないせいで、キリンはどこにでもいて、保全の危機には直面していないと思われてしまっているのです。しかし、35 年の間に個体数は 30% 減少しており、保全の重要性が問われています。

